

せりの声が飛び交った

円山朝市

明治時代になって札幌の開拓が進み、人口が増えてくると、市街地での野菜の需要も高くなってきました。それまでの農家は、主に近隣の住民を相手に野菜を売っていましたが、需要の高まりを受け、次第に街まで運んで売り歩くようになったのです。さらに、その野菜をまとめ買いして小売りする仲買人も現れ始めた。

明治の中ごろ、そうした農家や仲買人が、当時街外れだった南一西一一付近に自然と集まるようになってきました。ここには、平岸や豊平、白石、琴似などからも農家が集まってきましたが、中でも円山方面から来る農家が多かったことから、いつの間にか、円山朝市と呼ばれるようになったといわれています。

当時は、現在のように、野菜を冷蔵庫で保管しておくことができない時代です。仲買人は、その日のうちに仕入れた野菜を持ち帰り、売り出さなければなりません。そのため、せりは早朝から取引が行われ、最も市場が活気づく時間帯は、午前五時



大正時代の円山朝市
(札幌市教育委員会文化資料室所蔵)

ころだったといひます。

岡山朝市では、多くの農家や仲買人が参加し、自然とその日の相場価格が成立するため、安定した価格で取引することができました。また、仲買人は一カ所できまざまな野菜を手に入れることができ、農家にとつても、どんな野菜でも売ることができる上、早朝に取引が終わるので、帰ってから農作業を続けられるという利点がありました。そのため、ますます多くの農家や仲買人が集まるようになり、大正七年（一九一八年）には、朝市を運営する組合がつくられるに至ります。

盛況ぶりが増していく中、市街地が広がるにつれ、朝市の場所も徐々に西へと移動していきました。十二年には、南一西二四から大通西二四丁目までの一角に、荷馬車置場などを備えた建物も完成しました。その後も、札幌に暮らす人々への野菜提供の中心地として長い間にぎわいましたが、自由な取引が難しくなり、そのにぎわいも次第に失われていきました。

（平成十五年六月号 第九十回）